

五旬祭に集まって祈る者たちに聖霊は降り(使徒 2:1~3)、各々が異言を唱え出した(2:4)。その様を傍から見れば泥酔だが(2:13)、諸外国から帰郷した敬虔なユダヤ人たちは(2:5)、心の深部に届くそれぞれの母語で聖霊の言葉を聞いた(2:8)。

五旬祭でごった返す市街、群衆のほとんどは酔っ払いの戯言だと蔑んだ。こんな蔑視を受け、使徒たちは立ち上がり、ペトロが演説して(2:14)預言書を引いた。

「わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。あなたたちの息子や娘は預言し、老人は夢を見、若者は幻を見る。その日、わたしは奴隷となっている男女にもわが霊を注ぐ(ヨエル 3:1~2,使徒 2:17~18)」。

聖霊はこの地上で、階層や世間や長幼の差なくあらゆる立場の者に降る。そして夢や幻、預言に従って創造の業が実現する。そのように神と結びついて「主の名を呼び求める者は皆、救われる(使徒 2:21)」。

息子や娘が家長の支配下にあっても、発せられる預言はいかなる抑圧に勝る。体力や気力が衰えた老人にも夢が与えられ、未熟な若者だとしても幻が与えられて、神の創造のヴィジョンを存分に描く。また奴隷であろうとも、男女の違いなくキリストの体(教会)の一員として霊的な働きを為す。

世では、能力や身分で人間に段差をつけるが、聖霊が降る所にそうした段差はまるでない。教会では信仰歴や熱心さの度合いなどで自分の立場をわきまえたりするが、そんな自己規制もやめをしたい。未熟な若者が幻を見、衰えた老人が夢を見るのだから。

老人よ、若者よ、聖霊によって夢見る幻を遠慮や節度でしまい込まないでほしい。愛にがっちり捉えられたあなたはキリストの働き人なのだから。

「ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたがたに証明なさった(2:22)」。

奇跡、不思議な業、しるし、とは何であろうか。福音書がこれらを詳しく伝えているが、ただ奇跡と言わず、ただ不思議な業と言わず、ただしるしと言わないのは、イエスが行なった業の多様さゆえではないか。

そしてそれは、どこで行われたのか。「あなたがたの間で」だ。「ナザレの人イエス」という呼称は、地上におけるキリストの姿。聖霊の多様な現われは、この地上において「私たちの間」で実現する。

「奇跡、不思議な業、しるし」を、「力の拡張」として用いようとする者がいる。「イエスを試そうとして、天からのしるしを求める者がいた(ルカ 11:16)」。

不思議な業である「天からのしるし」を、操作できるものに貶める宗教性。呪術めいた手法で、神の業を操作しようとは、たとえ善意の動機からであってもおそろしく不遜だ。人間がどうにかできるようなしるしなど、不思議でも何でもない。

「ナザレの人イエスこそ神から遣わされた方(使徒 2:22)」。私たちはこの方を通して神の不思議な業を知る。だから奇跡やしるしは、初代教会にだけに起こりうるものではない。今なお聖霊は祈る者の上に降っている。

つまり、病む人と共に神がおられることを感じ、祈る場に聖霊がずっと吹き抜け、発言すべき事に対しては、同調圧力をもものともせず誰からもキリストの言葉が溢れ出る(ルカ 19:40)。

「イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡、不思議な業、しるし(使徒 2:22)」。世は見えないウイルスに委縮しているが、世に働かれるキリストはすべてを超えていく。慎重に、幻を見極めよ。



《おまけのひとつ》

病を払う神癒 快復する結果は現代医学のそれと違いはない つまり治癒それ自体は特別ではない 世界中が顔と顔を合わせて語ることも今や奇跡ではない 奇跡はキリストによって深く掘られる事